

香川宣阿加点詠草（上）

神作研一

解題

本稿は、元禄期の上方地下歌人香川宣阿（正保四年〈一六四七〉生、享保二〇年〈一七三五〉九月二二日没。八九歳）による添削資料二二点の影印と翻印である（すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵）。

他に知られる宣阿の添削資料は、今のところ、『岡山神社日記』（岡山大学附属図書館池田家文庫蔵）に転写された、備前岡山の門人に対する宝永・享保期のもののみだから、ここに添削の一次資料（美濃と京とを往還した原資料群）がまとまって出現したことの意味はすこぶる大きい。資料編として本文の全貌を紹介する所以である。ただし、分量が多いために一括掲載を見送り、今号（上）と次号（下）の二回に分載する。今号には、まず、年次未詳ながら加治田添削資料群の嚆矢かと推断されるAをおき、次いで年次の判明するもの四点（B〜E）を並べた。それらの書誌的概要は次の通りである（アルファベット次段（ ）内の算用数字は『美濃加治田 平井家文藝資料分類目録』の通し番号）。

A (349) 副隆等 and 歌百六十五首

*（宝永末・正徳初頃）、香川宣阿点。

* 12 / 242。

継紙一通。縦一四、三糎×横一二七〇、四糎。楮紙（総裏打）。副隆・仙庵・貞恒・好形・好覚・任候・其由・丹芝詠。奥書「拳直八十六首／右何も珍重／／宣阿（花押）」。端裏ナシ。卷末二作者八名ノ点取表ヲ後書。

B (352) 副隆等 and 歌四十五首

* 正徳元年、香川宣阿点（六五歳）。

* 12 / 241。

継紙一通。縦一四、〇糎×横三三〇、五糎。楮紙。副隆・宜風・仙庵・好覚・好形・貞恒詠。奥書「点三十六首／右何も珍重／／宣阿（花押）」。端裏「京師味吟正徳元卯年」。実八五四首アリ。

C (353) 副隆等 and 歌三十一首

* 正徳元年、香川宣阿点（六五歳）。

* 12 / 174。

継紙一通。縦一六、〇糎×横二九〇、六糎。楮紙（総裏打）。副隆・其由・宜風・好覚・好形・仙庵・貞恒・交計・鹿芥詠。

奥書「点十八首／何も面白珍重く／宣阿（花押）」。端裏

「正徳元卯梅月堂加筆」。卷末二作者九名ノ点取表ヲ後書。一
八番歌ハ貼紙ニ上書シタモノ。紙継ノ所ニ墨小印ヲ押捺。

D (354) 好形和歌百首

* 12 / 120。

* 正徳二年、香川宣阿点（六六歳）。

紙一通。縦一四、五糎×横六七五、七糎。楮紙（総裏打）。

好形詠。奥書「愚点六十五首此内長式／右一卷別て面白御哥

共／珍重く／宣阿（花押）」。端裏「梅月加筆正徳二辰年」。

少虫損。紙継ノ所ニ墨小印ヲ押捺。

E (355) 仙庵等和歌四十三首

* 12 / 175。

* 正徳三年、香川宣阿点（六七歳）。

紙一通。縦一五、七糎×横三五八、七糎。楮紙。仙庵・好

覚・副雄・冬音詠。奥書「点一十八／何も珍重く／宣阿」。

端裏「宣阿加筆正徳三辰年⁽¹⁾」。末尾二作者四名ノ点取表ヲ後

書。

なお、翻印にあたっては、これまでの方針をおおむね踏襲した。詳

細は次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

(1) 拙稿「楽軒岡俊直とその周辺——近世中期岡山学芸史一面——」(『金

城学院大学論集(国文学編)』三八号、一九九六・三) 参照。

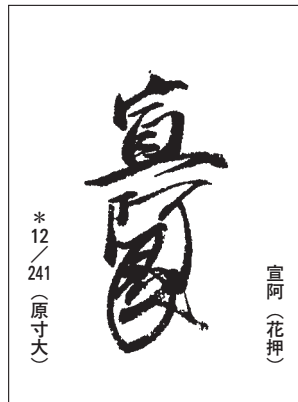
(2) 拙稿「元禄の添削」(『近世文藝』八一号、日本近世文学会、二〇〇五・

一) 参照。

(3) 加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、二〇〇五刊。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に厚く御礼申し上げます。

(かんさく・けんいち 本学文学部教授)



宣阿 (花押)

* 12 / 241 (原寸大)

凡例

- 一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白を切り継いだところがある。
- 一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。
- 一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。
- 一、評語は 〽 〽 内にくるんで掲出し、適宜句読点、引用符（「」）を施した。
- 一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。
- 一、「〔 〕」内は、神作による注記である。
- 一、漢字は、適宜通行の字体に改めた。
- 一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。
- 一、虫損等による判読不能箇所は、□で示した。
- 一、一部に、傍書注記の類を残したところがある。
- 一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜（ママ）と注記した。
- 一、巻末の点取表にまみ見出される数字の誤りについては、煩雑を避けて（ママ）を付すことはしなかった。

〈影印編〉

A 副隆等和歌百六十五首

* (宝永末—正徳初頃)、香川宣阿点。

(端裏) ナシ

詠百六十五首全帙

17
282

仙臺上
好歌

三春

1 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

副隆

2 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

3 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

初春

4 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

徳蔵

初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

5 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

6 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

直祖

初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

7 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

8 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

好形

初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

山家とま

9 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

聖

初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

子日

10 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

西震

11 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

徳蔵

12 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

好形

13 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

14 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

好形

15 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

16 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

17 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

全

18 初春のつゆのけけ久ぬ
空も長閑よ春はまよふ

雪中草

16 晴るの雪の中の雪を
まじけつけて初雪とす

谷草

17 一の丁の谷草の雪の
わけぬき言ふと雪のしめく

若菜

18 万が一の雪の跡は雪の
輪とて若菜の芽のつらぬ

残雪

19 古年の残雪とて雪の跡
ゆきののちとて雪の跡

春雪

20 若菜摘みまぐらぬれぬ
松の枝はまぐらぬれぬ

21 古年の雪跡をりり雪を
雪より毛脱げ流る

22 ちやく程あけ流る雪を
る雪かき雪の跡

23 雪のふり雪の跡
雪のふり雪の跡

24 生雪はゆきながら雪
はまぐらぬれぬ

25 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

早蕨

26 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

27 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

行歌集

27 道のぬれぬ雪の跡
雪の跡の雪の跡

夜梅

28 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

残雪

29 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

夜草

30 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

霞中序序

31 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

帰序

32 雪の跡の雪の跡
雪の跡の雪の跡

春月

33

かくも物とて春はあつ
月とて夜とてあつ ぬれ菴
あつ

34

遠くぬき雲は酒を飲むは
舌使て足もりの新新 形

蛙

35

雨をのたまれは山田もふ
あつ呼もつ 蛙鳴く 形

山家春

36

世といふ言まき重宝も
山家の花乃鳴はむ 形

華

37

社まもわかち花のたつ春は
春のあつちつ あつ
あつ

田水花

38

春本れい花もあつしはなり
人ふもあつ あつ
あつ

名不美

39

あつしつ春はあつしつ
あつしつ あつ
あつ

言山集

40

あつしつ山家の花はあつしつ
あつしつ あつ
あつ

山家花

41

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

言春花

42

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

夕花

43

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

三月三首

44

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

藤

45

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

池花

46

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

山次

47

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

三月盡

48

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

49

あつしつあつしつあつしつ
あつしつ あつ
あつ

54 當浦
 けりてくしやあまの志を
 三つふの事の新しきも
 53 邦云
 鳴る君は神もすけり形云
 して初知ゆへふもりうろ
 52 邦云
 春は此明き月夜
 こそとくあふ夜形
 51 恒
 けりてくしやあまの志を
 三つふの事の新しきも
 50 隆
 けりてくしやあまの志を
 三つふの事の新しきも

61 隆
 山田の住 早苗
 60 早苗
 民のたれいなるわさし
 62 隆
 山田の住 早苗
 63 早苗
 民のたれいなるわさし
 64 隆
 山田の住 早苗
 65 早苗
 民のたれいなるわさし
 66 隆
 山田の住 早苗
 67 早苗
 民のたれいなるわさし

62 隆
 山田の住 早苗
 63 早苗
 民のたれいなるわさし
 64 隆
 山田の住 早苗
 65 早苗
 民のたれいなるわさし
 66 隆
 山田の住 早苗
 67 早苗
 民のたれいなるわさし

東の海

68 今も手折の日は波は浦に
と降り行かぬ空 隆

水巻

69 待たぬとて水巻の核の
たぐりぬき 隆

70 水にわたる水巻の核の
たぐりぬき 隆

雲

71 雲の影をよみ 雲の影をよみ
人々よみ 隆

72 晴る月をよみ 雲の影をよみ
光輝いて 隆

河童

73 河童とよみ 河童の影をよみ
水にわたる 隆

松子

74 松をよみ 松の影をよみ
おまけよみ 隆

夕顔

75 夕顔をよみ 夕顔の影をよみ
夕顔をよみ 隆

夏月

76 夏月をよみ 夏月の影をよみ
夏月をよみ 隆

77 夏月をよみ 夏月の影をよみ
夏月をよみ 隆

78 夏月をよみ 夏月の影をよみ
夏月をよみ 隆

79 夏月をよみ 夏月の影をよみ
夏月をよみ 隆

80 夏月をよみ 夏月の影をよみ
夏月をよみ 隆

水巻

80 水巻をよみ 水巻の影をよみ
水巻をよみ 隆

81 水巻をよみ 水巻の影をよみ
水巻をよみ 隆

82 水巻をよみ 水巻の影をよみ
水巻をよみ 隆

83 水巻をよみ 水巻の影をよみ
水巻をよみ 隆

蝉

84 蝉をよみ 蝉の影をよみ
蝉をよみ 隆

85 蝉をよみ 蝉の影をよみ
蝉をよみ 隆

86 蝉をよみ 蝉の影をよみ
蝉をよみ 隆

87 蝉をよみ 蝉の影をよみ
蝉をよみ 隆

86 夕呼
 岸を眺め懐いもらよよよ
 鳴るて惜身今とはなと
 全

87 夕沈涼
 山の端に残るるの霞きて
 暮れに
 夕の霞は秋かな
 隆

88 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

89 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

90 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

91 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

92 初秋
 時をくまはれ
 隆

93 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

94 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

95 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

96 七夕
 夕の霞は秋かな
 隆

97 七夕
 夕の霞は秋かな
 隆

98 七夕
 夕の霞は秋かな
 隆

99 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

100 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

101 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

102 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

103 夕沈涼
 夕の霞は秋かな
 隆

104 秋夕
 夕の霞は秋かな
 隆

105

秋ももはるの音のせしに
あまのこゝろを袖帯に全

106

海辺秋風
御去の信浦宮屋ま書きて
物よ能可秋のそ吹形

107

暮去の信浦の巻ふたせり
荒れ物よ秋のそ吹巻

108

二又城跡のるよりなり
あまのこゝろを秋の吹らん隆

109

百種あまのそ吹れん
あまのこゝろを秋の吹らん巻

110

時よあまのそ吹れん
あまのこゝろを秋の吹らん由

111

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん覺

初居

112

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん隆

113

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん形

114

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん全

長初居

115

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん巻

旅行居

116

あまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん恒

草山鹿

117

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん形

草山鹿

118

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん形

119

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん巻

草山鹿

120

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん巻

121

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん覺

122

草山鹿のあまのこゝろを秋の吹らん
あまのこゝろを秋の吹らん隆

123

きりす言を枝の葉に
肺くまとはせきり物と 由

124

山月
いづれもあはれん 隆

125

山月
汗見りそ乃の月ぬれぬ 恒

126

山月
いづれもあはれん 恒

127

山月
月の方の光を咲らん 春

128

山月
いづれもあはれん 恒

129

山月
いづれもあはれん 隆

130

山月
いづれもあはれん 恒

131

山月
いづれもあはれん 恒

132

山月
いづれもあはれん 恒

山月

133

山月
いづれもあはれん 隆

134

山月
いづれもあはれん 春

135

山月
いづれもあはれん 恒

136

山月
いづれもあはれん 春

山月

陸落葉

137 月影の森は下ゆらんやむさ

月影の森は下ゆらんやむさ形

定夜

138 月夜光の電三行の

月夜光の電三行の植

雪書

139 雪の夜は保の空月夜

雪の夜は保の空月夜形

海邊雪書

140 月明の月も明若し浦風

月明の月も明若し浦風形

定電

141 年電三言と定電と定電と

年電三言と定電と定電と形

庭雪

142 庭雪待あゆみゆく定電

庭雪待あゆみゆく定電隆

雪書

143 雪の夜は保の空月夜

雪の夜は保の空月夜隆

山雪

144 雪根も定電村と定電と

雪根も定電村と定電と形

雨庄雪

145 雨庄雪の三言と定電と定電と

雨庄雪の三言と定電と定電と形

歳言

146 年言も月言と歳言と

年言も月言と歳言と隆

山家風言

147 山家風言も定電と定電と

山家風言も定電と定電と形

忍忠

148 忍忠も定電と定電と

忍忠も定電と定電と菴

雅面忠

149 雅面忠も定電と定電と

雅面忠も定電と定電と隆

150 忍忠も定電と定電と

忍忠も定電と定電と隆

初巻

151 萬載の神はるるよまをさす

彩る世はるる新向りりり

車東詩巻

152 傍におきいかりもこの世に

為さむのみく我友侍人

寄時巻

153 且用世出時をかてり

物もまくとて世を惜ま

寄内巻

154 君もんを我へおまね

吹よけても忘帰らん

各所

155 此江の後の山も今もあま

是れ世にわたりゆく

156 旅枕をたのむも疎

小舎の山はくをまをる

157 岩根秋は西川の水は

松鳴風とちまわります

旅書

158 吉せりの三まよと

花社の扉を扱うりり

古寺

159 世の中は人の海を

行路のまはるるま

休懐

160 流るる水も木心うか

あまれらるる世の

寄松祝

161 是れなむ松は松を

又たかくるる方

寄竹祝

162 初るまの松と異竹の

比ふまはるる又

賀

163 生かす海もまらふ竹の

幾分けて又を

164 海を世をよて

吹よけても忘帰らん

165 天地のあは限

もに

霧中鹿

31 柝^{トク}鹿の声はゆめさき^{ユメ}

霧踏^{キリ}分^ワく^クい^イづ^ヅに^ニは^ハ

32 三^ミ葉^ハの心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

33 先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

34 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

35 音^ネは^ハな^ハな^ハ

音^ネは^ハな^ハな^ハ

36 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

雲中鳥

37 明^{アキラ}く^クの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

明^{アキラ}く^クの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

38 先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

39 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

40 音^ネは^ハな^ハな^ハ

音^ネは^ハな^ハな^ハ

41 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

42 先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

枯葉

43 先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

44 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

45 音^ネは^ハな^ハな^ハ

音^ネは^ハな^ハな^ハ

46 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

47 先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

先^マづ^マの^ノ音^ノは^ハな^ハ

48 三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

三^ミ葉^ハの^ノ心^ノの^ノ報^ヒ多^ク

山吹松

49 山吹の松をさして住むつとせ

かきくぬこの松樹をさす

50 葉の層は網夕独住るは

たか松のこゑと社まれ

51 松風の音をなつて山は

うき浜訪事人毛おれ

52 山松は長雨風の吹とふ

都の春も思ひ居りし

53 葉のそよ風を住む網をさ

かきぬ色の松は見えぬ

54 花あまたは松吹風のうき

とふ人あまた思ひ居りし

悪可六首

右河大権

副 九点 七点 七点 七点 七点 七点
宜 七点 七点 七点 七点 七点 七点
仙 七点 七点 七点 七点 七点 七点
免 七点 七点 七点 七点 七点 七点
真 七点 七点 七点 七点 七点 七点

C 副隆等和歌三十一首

* 正徳元年、香川宣阿点。

(端裏)



歌三十一首和歌
副隆

峯

早苗

1 古林豊成河平一志の首

二首のつりあは

日 此は早苗の早苗のつりあは

2 甲苗五田葉は社代

其由

日

3 尾葉はの身田水端

其由

19 風の吹流し今いふ也 竹
 ありこれ木の葉也 竹
 20 葉したれたせき 竹
 葉の靡よ木の葉散らる 竹
 21 遠近のふきき 竹
 枚すきよ木の葉散らる 竹
 22 神皇月時 竹
 さやのきよ木の葉散らる 竹
 23 訪るきせし 竹
 海原へ 竹

竹の葉の散らるる
 竹の葉の散らるる

24 春來 竹
 声も長閑 竹
 25 梅枝 竹
 初春長閑 竹
 26 田代 竹
 井原里 竹
 27 降積 竹
 春の雪 竹
 28 柳 竹
 柳て 竹

竹の葉の散らるる
 竹の葉の散らるる

29 時來 竹
 意の中 竹
 30 里到 竹
 長閑 竹
 31 一片 竹
 鳴着 竹
 何 竹

竹の葉の散らるる
 竹の葉の散らるる

16 善山善山 山山
 かくたつた山海抄もく末の巻
 善くは惜まじとの下院

17 方
 夏曲下堂の美御りまのま
 田子け備者法加より

18 疑疑
 河表の美御りまの山吹乃
 嘆りよまの玉川の山里
 善春

19 吉野川浪は慈ほくれの三か
 ちんたつたれまてまわり

20 更衣
 移りし年の秋かかぬまは
 今細いおのりも涙りりりり
 外外

21 外外
 秋はさゆの夜終印の飛
 まつてまの玉川のみ

22 初時鳥 初時鳥
 久かこの定よりまはる屋中
 山吹さのくひもまて

23 待詠
 侍候の御あはれ御
 只一声又はそ文行

24 一夜は明もはる夜も
 ぐらつたあまのかりまきの鳥
 大りる

25 人の海よりまの秋時
 鳥の御はのまはり行
 かりあのと浮てまゆれ

26 かりあのと浮てまゆれ
 かりあのと浮てまゆれ

27 早苗 早苗
 かりあとのまはるもけす
 ちのう田あまの苗まわり

28 かりあのと浮てまゆれ
 まはる苗まわり

29 螢
 螢はほるまのまはるも
 まはる苗まわり

30 暮日 暮日
 村あけ晴行はるのまはる
 まはる苗まわり

31 暁 暁
 さるまのまはるのまはる
 朝のまはる苗まわり

32 シル シル
 時あまのまはるのまはる
 まはる苗まわり

33 シル シル
 まはる苗まわり

六り板

34 長き道のほろ道もなぬと

君をく人の末福すなり

三つひの秋

徳一之秋

徳一之秋

初秋風

36 去りあふ市の雅もなぬ

空の風と秋もなぬ

七夕

37 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

38 空の秋とよあけ

空の秋とよあけ

七夕板

39 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

魂祭

40 かな玉のすくもなぬ

いづかきぬあめたま

41 神の三疊人物も天の川

今宵の三疊人物も天の川

唐

42 風吹く板とらたて

そと置候し秋のゆつり

唐

43 舟の三疊人物も天の川

秋の三疊人物も天の川

44 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

唐

45 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

46 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

秋夕

47 秋夕の舟もなぬ

舟の三疊人物も天の川

48 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

49 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

50 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

51 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

52 舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

舟の三疊人物も天の川

53 詠詠の虫 竹
昔物移まらぬ秋の夜半

アノコトヲモウツク明すん

昔人の危く過る夜を
写の物も虫も鳴らんと今何
り後年也

54 詠詠の虫 竹
昔物移まらぬ秋の夜半

アノコトヲモウツク明すん

い家初宿

55 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

56 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

い家初宿

57 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

58 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

59 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

い家初宿

い家初宿

い家初宿

60 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

61 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

62 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

63 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

64 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

65 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

66 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

64 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

65 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

66 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

67 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

68 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

69 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

70 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

71 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

72 山三三子の初宿 川崎
物移らぬ秋の夜半

い家初宿

70

夕時を
本枯まねをわしてむくせれ
いづら火をく夕時雨をれ

71

夜時を
このころ祈れりり古ま
あれゆるおの小夜の時を

72

暁更時を
長夜の時を物作人そ
暁もゆくは時をくれ

73

路傍菜
えさくはるうねのさな
木の葉よりく木の石

74

それ
脚の甲あて風の音おれ
おれ水もその音の月

75

海邊千鳥
夕霧の海津の浪の流る
むれくちりくきさなり

76

夜水を
そりの入はのぼるは
花の露のな祈り

77

初雪
けしけりあはれ三吉の
山の雲まき降る白を

78

浦雪
さめ草は果てくきもな
うらえの浦の霧の厚を

79

永春も浦雪のはの氷を
このころ雪の音の空に
浦雪

80

限るその目たれくちり
あむ甲斐ちくきもな

81

五五
まの餘は油のつゆの
珠不わあきり

82

今更神も涙をのれり
のこりて人休まきり

83

今更神も涙をのれり
風の川は雨の音を

84

新雪もちり物くは
かへそいの神の手を

85

あめゆりの神を
あめゆりの神を

86

雪もちり物くは
あめゆりの神を

87

雪もちり物くは
あめゆりの神を

88

雪もちり物くは
あめゆりの神を

89 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

90 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

91 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

92 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

93 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

94 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

95 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

96 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

97 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

98 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

99 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

100 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす
 旅おろす

見送六十寿
 右馬判り
 真夏

E 仙庵等和歌四十三首

* 正徳三年、香川宣阿点。

(端裏) 正徳三年正徳三年

詠四十三首傳歌



初春

1 月訓ゆる草木まよひの文春上 他者

長つおは明る天の初春身

子日

2 足下か君か仙

子の日の去の文とに先一

おれ業

3 節と屋敷音の下ま仙

楠やたしき色は

追討

仙

4 妻長と床の月をよみ合る

あふ短衣よこり代

5 暁来仙

こりのむらり秋

虫

好光

6 跡宅の境は

秋もけこ

初宿

副雄

7 秋凡は時をは

さかるとは

夜麻

冬音

8 又は

物おま

田家秋泉

冬音

9 穂は

いくは

九月の日

冬音

10 長月は

ととは

人の

と

11 けは

いらは

五月

冬音

12 凡は

ゆは

29 野も山も美白の雪の
好覚

大まかにいりてん

雪

30 足巾のらびは日影のゆき
仙

下へ音なきまきの下

心

31 雪の日の光まといふ
好覚

まろくくえぬる雪の白

浦

32 雪のふしの言根は足
好覚

浪はゆき〜田の浦

積

33 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

34 おもひの雪のふし
好覚

積りゆきゆきゆき

雪

35 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

36 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

37 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

38 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

39 雪のふしの言根は足
好覚

40 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

41 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

42 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

43 雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪

雪のふしの言根は足
好覚

雪のふし〜はまの白

雪のふしの言根は足
好覚

〈翻印編〉

A 副隆等和歌百六十五首

〔端裏〕 ナシ

〔内題〕 詠百六十五首大和哥／仙庵上／好形上

- | | |
|---|--|
| <p>1 ○君が代は千代万代を久堅の空も長閑に春は来にけり
 立春 副隆
 〈宜候〉</p> | <p>8 ○天の戸の開けて今朝はおのづから霞初つゝ春は来にけり
 山家立春 副隆
 〈宜候〉</p> |
| <p>2 ○君が代は限しられぬ四方の海ふかき恵の春は来にけり
 同
 〈宜候〉</p> | <p>9 ○鶯の鳴音に春ぞしられける柴の扉の雪は消ねど
 子日 同
 〈宜候〉</p> |
| <p>3 朝霞たな引初て高砂の尾上にぞ先春は来にけり
 初春 僊庵
 同</p> | <p>10 万代のためしにぞ引梓弓春立野辺に生ふる小松を
 霞 僊庵
 同</p> |
| <p>4 ○あら玉の年立帰るしるしには霞て見ゆる今朝の曙
 同
 〈宜候〉</p> | <p>11 ○昨日より今朝は霞の立籠て木々の杪も見えわかぬなり
 好形</p> |
| <p>5 初春の印とてかはなべて吹風も長閑に思われぞする
 貞恒
 同</p> | <p>12 来し春の恵とてかはわたつ海の底より霞む淡路嶋山
 同</p> |
| <p>6 明初る天の戸ほその朝霞たな引空に春は来にけり
 ○明わたる天の岩戸の朝霞たな引初て春は来にけり
 同</p> | <p>13 ○汀迄寄来る沖の波間より霞て見ゆる淡路嶋山
 檜原霞 隆</p> |
| <p>7 出る日も長閑きみづの初とていとなみちぎる万代春
 好形</p> | <p>14 ○色かへぬ三輪の檜原の奥なれば春をしらじと霞たな引
 同
 〈宜候〉</p> |
| <p>17 出る日も長閑きみづの初とていとなみちぎる万代春
 好形</p> | <p>15 守る人も留めかねてや相坂の関のこなたに鶯の鳴
 関路鶯 同</p> |
| <p>16 ○時わかぬ雪の中にも鶯は春をつけてや初音をぞ鳴
 谷鶯 形</p> | <p>16 ○時わかぬ雪の中にも鶯は春をつけてや初音をぞ鳴
 雪中鶯 庵</p> |
| <p>17 ○このごろはをのが古巢の谷の戸にあけぬ暮ぬと鶯ぞなく
 若菜 隆</p> | <p>17 ○このごろはをのが古巢の谷の戸にあけぬ暮ぬと鶯ぞなく
 若菜 隆</p> |

18 ○万代も生田の野辺の雪間には摘ど若菜のたまりかねぬる

残雪 庵

19 古年の形見とてかは消残る外山の雪を花とまがへて

春雪 好覚

20 若菜摘比しも今は来ぬれども松の葉しらく雪は降なり

隆

21 ○古年の名残なりけり霞ぬる空よりも猶降る淡雪

〈宜候〉

形

22 打はらふ程はあらねど淡雪に過行がたき志賀の山越え

若草 隆

23 きのふけふ春も来にけり若草の緑に見ゆるむさしのゝ原

○きのふけふ春は来にけり若草の緑に見ゆるむさしのゝ原

〈宜候〉

覚

24 生出て同じ色なる若草のいづれか秋の花と咲めや

○生出て同じ色なる若草のいづれか秋の花と咲べき

〈珍重〉

早蕨 隆

25 足曳の山の陰にも隔なき春ぞと見えて生ふる早蕨

柳 形

26 時ぞとて翠に見ゆる青柳の風になびかぬかたとてもなし

○時ぞとて翠に見ゆる青柳の風になびかぬ枝とてもなし

27 ○道の辺のあるじもしらぬ梅花往来の人を頼てや咲

夜梅 庵

28 宵ねせし我手枕に匂ひ来る花は何れの里に咲らん

帰雁 隆

29 ○霞立高根に雪の残れるを花かと見てや帰る雁がね

〈珍重〉

夜帰雁 形

30 雁がねの月にたぐへて帰るまで枕に近き声ぞ聞ゆる

霞中帰雁 形

31 倂は霞につれてわかねども音にあらはれて帰る雁がね

帰雁 庵

32 人しらぬ越路の契り堅にや時したがへず帰る雁がね

春月 庵

33 かくばかり物思へとや春の夜の月は霞を出もやらねば

○かくばかり物思へとや春の夜の月は霞を出やらぬ影

34 塩焼ぬ志賀の浦さへ夜くは霞て見ゆる月の影哉

蛙 形

35 雨雲の立重れば小田毎に友呼かはし蛙鳴也

山家春 形

36 ○世をいとふ身にさへ春をしられけり山路の花の咲に付ても

華 覚

37 ○ね覚(マ)にもかほる枕の花の香に春の夜ながら夢は覚けり

〈宜候〉

閑居花

隆

38 春来れば花にかくれもなかりけり人にしられぬ柴の扉も

名所華

庵

39 名のみ聞吉野、山に来て見れば今ぞ桜のさかり成晷

暮山華

庵

40 ○暮かゝる山路の花は月雪(雪)の詠には猶増りこそすれ

山家花

形

41 世の人もとはぬ軒端の山にさへ春をあるじと花ぞ咲ける

暮春花

形

42 みよしの、吉野、山の桜花咲も残らぬ春の暮かな

○みよしの、吉野、山の桜花咲も残らで春ぞ暮行

夕花

形

43 ○しばしとて立寄花の陰ながら家路忘る、春の夕ぐれ

〈珍重〉

三月三日

庵

44 弥生立今日の詠は幾年も替らずめぐる花の盃

藤

庵

45 紫の雲に見まがふふじ(マ)の花暮行春の印にや咲

紫の雲に見まがふふぢの花暮行春の印にや咲

池藤

隆

46 ○池水の汀の藤の咲しより音なき波ぞ立増りぬる

〈宜候〉

山吹

隆

47 名にし逢詠もふかき山吹の色こそ春の限りなりけれ

名にしおふ詠もふかき山吹の色こそ春の限りなりけれ

三月尽

形

48 遠近の山に霞は引はへどけふを限の春の暮かな

庵

49 ○立増る霞も消て行空の入逢の鐘に春は暮けり

〈宜候〉

更衣

隆

50 ○限あれば春も移ふ花衣かへても袖に匂ひ残れる

恒

51 ○ぬぎかふる袂も惜敷花の香のうすくも移るせみの羽衣

〈宜候〉

卯花

形

52 短夜の明て残りし月影としらけて見ゆる夜の卯花

郭公

形

53 鳴ぬ間はねられざり(ざり)けり郭公いつ聞初しゆふべよりかは

菖蒲

庵

54 ○おり立て引やあやめの長き根を君が千年の軒にこそふけ

〈宜候〉

五月五日

隆

55 ○時なれや余所にのみ見し菖蒲草けふは沢辺におり立て引

- 66 ○打群て暮ぬ先にと帰るなり山田の早苗取も分ねど
形
- 65 山人も世を渡る身の習とて軒もる小田に早苗取也
形
- 64 夕暮の真菅の笠は早苗田の取はけ（マ）白き物にぞ有ける
山田早苗
形
- 63 いにしへは露にも濡し衣手の替らず今も早苗取也
其由
丹芝
隆
- 62 ○風さそふ朝の衣の朝まだきぬれつゝ人の早苗取なり
任候
隆
- 61 ○せきいるゝ水も緑に見えつるは山田に種し早苗なり梟
隆
- 60 民の身のいとなむわざと五月雨に濡つゝ今日も早苗取なり
早苗
庵
- 59 あやめ葺軒は益田の池ならで世々の印に茂り逢ぬる
返し
覚
形
- 58 民の戸もさか行世々のしるしにはわゝしく軒にあやめ葺也
庵
- 57 ○なべて葺軒の菖蒲の打しめり香る五月の空も閑き
同
庵
- 56 今日来ぬと葺かざしにし菖蒲草幾軒端にや妻と成らん
恒
形
- 67 ○五月雨の晴間あらねば鈴鹿川八十瀬に高く見ゆる白浪
五月雨久
浦五月雨
隆
形
- 68 今日も猶暗ぬ日数に浦浪の立増り行五月雨の空
水鶏
庵
- 69 待人をもたぬ身なれば閨の戸をたゝく水鶏に驚かれぬる
○待こともあらぬ身なれば閨の戸をたゝく水鶏に驚かれぬる
形
- 70 涕はあらで水鶏の楨の戸をたゝくぞしるき短夜の空
螢
庵
- 71 草の葉に夕居る螢露とのみ人は見るらん月遅き暮
形
- 72 晴やらぬ月の夜毎は川岸に光増りて飛螢かな
○晴やらぬ月の夜なゝ川岸に光増りて飛螢かな
隆
- 73 瀬を早み川辺の末に流ても猶水上に螢もへぬる
撫子
隆
- 74 ○夏ながら涼しく見えて置露をおもげに咲る撫子の花
〈宜候〉
隆
- 75 夕がほのこき花染のかり衣ほのかに色の移りやはする
夕顔
覚
隆
- 76 ○秋さへもあかぬ詠を短夜はいかにおしめと月の入覧
夏月
隆

- 86 茂ぬる梢の蟬はもろごゑに鳴てぞ惜む今日の夕を
夕蟬 同
- 85 ○茂る木の梢数多に鳴せみの声に暑さぞ猶増りぬる
夕蟬 同
- 84 涼しさもあらで杪の蟬の声鳴みだれつゝ秋を待らん
隆
- 83 人毎に過しかねたる暑日を杪のせみのしらずやは鳴
蟬 庵
- 82 果しらぬ代々の調の印にはきへず有ける厚水かな
庵
- 81 ○水無月のけふは来ぬれど時しらぬむろの山はずしかりけり
隆
〈宜候〉
- 80 夏ながら涼しかりけり水無月のけふは氷室や解渡らん
氷室 隆
○夏ながら涼しかりけり水無月のけふも氷室の猶解ぬ日に
隆
- 79 うきわざの世にやつれたる山里は涼しさ増る夏の夜の月
由
- 78 夏の夜の月殊更に色見えて薄が原に風渡るらん
候
- 77 ○見る間なき影ぞと兼て知ながら猶おしまるゝ夏の夜の月
同
- 87 ○茂ぬる梢の蟬はもろごゑに鳴てや惜む今日の夕を
夕納涼 庵
- 88 山の端に残る夕日の陰きえて芝居しつゝも冷みする也
隆
○打出る河辺の浪の涼しきは夕の風に秋かよふらし
隆
〈宜候〉
- 89 ○風そよぐ端山の夏の夕暮は片敷袖も涼しかりけり
由
- 90 暮かゝる木陰尋て高筵すゞしき身にはうさも思はず
候
- 91 あさ衣ひとへの風はふかねども袂に宿る月ぞ涼しき
隆
初秋
- 92 時ぞとて草の原さへ今朝は早秋来にけりと置る白露
隆
- 93 夏草にまがへし物を花薄穂に出しより秋は来にけり
由
- 94 ○夏草にまがへし物を花薄穂にあらはれて秋は来にけり
庵
- 95 きのふけふ露置初る秋も来て袂涼しき萩の上風
候
- きのふけふ露置初る秋の来て袂涼しき萩の上風
隆
- 夏よりも雲の通路さめ行て空飛鳥に秋は来にけり
七夕

- 96 天の川深き契りの朽せねばいましも渡す笠鷺の橋
 ○天の川深き契りの朽せねば世々に（マ）に渡せる笠鷺の橋
 〈珍重〉
 隆
- 97 ○天の河希に逢瀬も幾千代をかけてぞ契る笠鷺の橋
 〈別て宜候〉
 形
- 98 さのみなど鳥も今夜は心せよ年に希なる星の契りに
 恒
- 99 ○今夜しも天の河瀬に立浪のよるぞ嬉しき妻むかへ船
 〈珍重〉
 庵
- 100 七夕の積る思を今夜こそ語り明さん天の玉床
 露
 形
- 101 ○秋風の吹ぬ限は草の葉に置白露ぞ玉と見えける
 〈宜候〉
 庵
- 102 半立秋のしるしと白つゆは朝な夕なに置増るなり
 覚
- 103 秋もまだ最中の月にたらねども萩の葉白く露ぞもるらん
 秋夕
 庵
- 104 いかにとて秋の夕は心にもあらぬ思ひをするぞ恋しき
 同
- 105 ○誰身にもひとつ思ひと聞からにあきのゆふべは袖濡也
 海辺秋風
 形
- 106 ○海士の住浦の苫屋も音立て枕に絶ず秋風ぞ吹
 庵
- 107 蚕の住浦の蘆屋はたゞさへも荒にし物に秋風ぞ吹
 霧中草花
 隆
- 108 宮城野は匂ふなりけり立籠る霧の中にや萩の咲らん
 庵
- 109 ○百種の花はそれぞと見えね共霧の中より香に匂ふなり
 由
- 110 時しあれば嘸な咲覧秋の野に花見えぬまで霧はありとも
 覚
- 111 草くゝの色こき花も今朝見れば霧立籠て匂ひ計を
 初雁
 隆
- 112 かすかにぞ音信初し一つらの雁は雲井に鳴渡るなり
 形
- 113 立迷ふ雲の高根を今越て来にしとつぐる雁金の声
 ○立迷ふ雲の高根を今越て来にしとつぐる初雁の声
 同
- 114 ○時ぞとて今朝聞初し天つ雁去年の枝折やとめて来ぬらん
 夜初雁
 庵
- 115 独ねの夢も結ばぬ小筵に秋や来ぬると告る雁金
 旅行雁
 恒

- 116 ○思ひ出て又故郷の恋しきに旅の空とぶ雁金の声
 〈宜候〉
 暮山鹿 形
- 117 ○足曳の山の端毎に鳴鹿の声も淋しき秋の夕暮
 夜虫 形
- 118 ○秋来れば何をかこちて蜚夜寒の床に鳴明すらん
 〈珍重〉
 庵
- 119 夜寒をばいとひかねてや此比は我床近く虫の鳴なり
 ○夜寒さをいとひかねてや此比は我床近く虫の鳴らん
 〈宜候〉
 旅館聞虫 庵
- 120 憂さこそは増れ旅路のかり枕枕に虫の声しきるなり
 覚 庵
- 121 もしほ草敷ねの床の秋更し旅の枕に鳴渡るむし
 隆
- 122 旅枕かりそめなれや秋の夜に鳴虫ならで音信はせぬ
 ○旅枕かりそめなれや秋の夜に鳴虫ならで音信もせず
 由
- 123 きりくす鳴や旅ねの草枕淋しかれとはさそはじ物を
 八月十五夜、くもりしを 隆
- 124 ○名にしおふ今夜の月にかく計いかでか雲のたな引ぬらん
 名にし逢今夜の月にかく計いかにや雲のたな引ぬらん
- 125 ○行めぐり雲間の月のもれ出て松の扉に影のさやけさ
 山家月 恒
 深山月 形
- 126 ○いとゞさへ淋しき山の奥なれば木の間もり来る月もさやけき
 庵
- 127 人行ぬ太山の木々も今夜しは月の光の花や咲らん
 惜月 恒
- 128 終夜詠尽じと行月の入さの山の影をたづねて
 名所紅葉 形
- 129 神なみのみむろの山に来て見れば梢残らず紅葉しにけり
 ○神なみのみむろの山に来て見れば梢残らず紅葉そめけり
 〈宜候〉
 暮秋 庵
- 130 うかりにし秋も暮と思ふにぞ猶したはるゝ有明の月
 ○うかりける秋も暮と思ふにぞ猶したはるゝ有明の月
 〈宜候〉
 形
- 131 朝な夕な馴るゝに付てうかりしとおもひし秋も終に暮けり
 初冬 形
- 132 枯かゝる草の葉末の朝霜の水と見えて冬は来にけり
 枯かゝる草の葉末に朝霜の水と見えて冬は来にけり
 夕時雨 隆
- 133 夕露に置と見ゆるは浅茅生に降残したる時雨なりけり

- 134 夜時雨 庵
冬来ればもらぬ時雨に幾度か老のね覚の袖濡すなり
○冬来ればもらぬ時雨に幾度か老のね覚の袖濡すらん
〈宜候〉
- 135 敷たへの枕たまらず音すなり晴るゝ間もなき小夜の時雨に
暁天時雨 庵 形
路落葉 形
- 136 暁の鐘うらめしきふたりねに袖やぬらせと時雨降なり
路落葉 形
- 137 ○片岡の森の下路見えぬ迄風に木の葉の降ぞ積れる
寒夜 恒 形
- 138 風渡る冬の夜寒み行月の影見し水ぞ先氷るなり
〈下旬、古哥にて候〉
千鳥 形
- 139 ○寒る夜は佐保の川原の月影に友よぶ千鳥声しきるなり
〈宜候〉
海辺千鳥 形
- 140 有明の月も明石の浦風に友まどはして千鳥鳴なり
〈上句、忠盛哥にて候〉
炭竈 隆
- 141 ○年寒み雪げの雲と見る迄にすみ焼煙立つぐくなり
〈宜候〉
庭雪 隆
- 142 ○兼て待友をもけふは跡付てとへとはいはじ庭の白雪
野外雪 隆
- 143 ○果しらぬ浅茅が原を詠れば空もひとつに積る白雪
山雪 形
- 144 高根には先村雲のまとはりて麓にばかり見ゆる白雪
閑居雪 形
- 145 うきをのみ逃れし柴の戸にさへもへだてかねてや雪の降らん
歳暮 隆
- 146 ○とゞまらぬ月日と兼て知ながら驚かれぬる年の暮かな
山家歳暮 形
- 147 ○世の人に住家しられぬ柴の戸もうき一年の終に暮けり
忍恋 庵
- 148 ○つゝむには猶しも思ひ乱るれど袖の涙は余所にもらさじ
難面恋 隆
- 149 見え初し事ぞ悔敷思ひ川なみだに浅き瀬とや成けん
隆
- 150 思ひ川深き心を奥つ波かりてもなどや難面かるらん
祈恋 形
- 151 ○葛城の神のいがきにしめはへて祈る恋路ぞ難面かりける
連夜待恋 隆
- 152 ○偽とおもひながらも言の葉を忘れがたみに幾夜待らん
寄時鳥恋 隆
- 153 足曳の山時鳥かくばかり物おもへとて音な惜みそ
隆

寄風恋

隆

○君来んと頼めし夜は、松風の吹に付ても恋増るかな

名所

庵

近江なる鏡の山に今日は来て曇ぬ世々の印をぞ見る

旅枕幾夜かさねて詠そふ小倉の山をけふぞ来て見る

○岩根越清滝川の水の音は松吹風とおもわれぞする

旅宿夢

形

故郷の事のみ夢に見えし夜は旅ねの床ぞ起うかりける

古寺

隆

世の中の人の涙やふる寺の軒端の草の露と置なん

述懐

同

○流ても帰らぬ水やうたかたのあはれうき世の様成覧

寄松祝

同

○尽せじな常盤の松の豊なる色にたくゑる君が万代

寄竹祝

同

○動なき国の様と呉竹の葉毎に千代の色を見すらし

賀

同

生出て露よりもろき若竹の幾千代かけて色も替らず

〓宜候

同

〓治れる世の印とて四方の海吹風迄もしづかなりけり

同

同

〓天地のあらぬ限は君が代とともに久しき敷嶋の道

〓珍重

同

165

〔奥書〕 挙直八十六首／右何も珍重／宣阿（花押）

〔点取表〕 六分八釐 点三十四 美十六

副隆 五十首之内 点三十八 美五

四分三釐九毛 点十八 美五

仙庵 四十一首之内 点二十一 美六

五分一釐二毛 点二十一 美六

好形 四十一首之内 点二十一 美六

一分六釐 点二十一 美二

好覚 十二首之内 点六 美三

六分 点六 美三

貞恒 十首之内 点六 美三

丹芝 一首 点一

任候 四首之内 点一

其由 七〔六〕ヲ上書 首之内 二点

B 副隆等和歌四十五首

〔端裏〕京師味吟（マツ）正徳元卯年

〔内題〕詠四十五首和歌／仙庵上

鶯

副隆

春ながらまだ雪深き谷の戸をおのれと出て鶯ぞなく

○春なれやまだ雪深き谷の戸をおのれと出て鶯のなく

〈珍重候〉

宜風上

○春立と葛城山にきて見ればたゞうぐひすの声ぞ聞ゆる

〈宜候〉

仙庵
副隆上

○長閑なる春のしるしに鶯も谷の戸出て里馴る声

〈宜候〉

好覚上

春をだに鳴ども未うぐひすの羽白妙に雪は降つゝ

〈「つゝ」どまり、よまぬ事に候〉

好形上

春毎に忘もやらでは雪の残る外山に鶯の声

○春毎に忘もやらでは雪の残る外山に鶯のなく

〈宜候〉

貞恒上

6 今日きぬと梅に木づとふ鶯の羽風に花の香ぞにほひぬる

○春きぬと梅に木づたふ鶯の羽風に花の香ぞにほひぬる

〈宜候〉

深山花

7

白雲のたなびく山に色深く咲花見んと枝折をぞする

婦見る深山の奥に春の来てこずへあまたに花ぞ咲ける

○あかづなを深山の奥の春に来てこずゑあまたの花ぞ咲ける

〈珍重候〉

9

○鳥さへも通ぬやまの淋しきに春をあるじと花は咲けり

〈珍重候〉

10

○山深く誰とふ人も無春を忘もやらで花は咲覧

〈宜候〉

11

○行道のあらぬ太山も春のきて霞まじりに花ぞ咲ける

〈宜候〉

12

婦見る山は夫ともわかねどもかへさにみゆる花の白雲

郭公

13

一声を聞初しよりほとゝぎす鳴夕暮ぞしのばれにける

○一声を聞初しよりほとゝぎす鳴夕暮ぞなをまたれぬる

〈宜候〉

14

はるくくと聞まほしさに尋きて唯一声を山時鳥

15

有明の月の夜ぞとて時鳥里を数多に百千返鳴

○有明の月の夜ぞとや時鳥里を数多に百千返鳴

〈珍重候〉

16 ○春暮て夏きに覺と時鳥篠田の森に初音をぞ鳴

〈宜候〉

17 きし方も行^{マツ}ゑもあらぬ時鳥しのぶのやまに鳴渡る也

18 来る年も初音急ぬほとゝぎす待を習に声惜むらん

新樹

19 ○散果し花の梢もいつとなく夏きに覺と緑添也

〈宜候〉

20 庭に生る翠の木々も茂り合て月の光もかけくらき也

○庭に生る翠の木々も茂り合て月の光もくらくなりゆく

〈宜候〉

21 ○夏来れば庭のこずゑの茂り合窓の日影もうとく成行

見渡せば花も梢も青かりし若葉の色になつはきに覺

○見渡せば花の梢も青かりし若葉の色になつはきに覺

移ひし花の梢も昨日今日日茂りて見ゆる庭の面影

24 ○いつしかと若葉添行印には窓の日影のうとく成つゝ

夜虫

25 秋の夜の長きおもひをいか計かこちかねつゝ虫の鳴らん

○秋の夜の長きおもひをなれも今かこちわびてや虫の鳴らん

〈珍重候〉

26 ○野をひろみ月の夜すがら松虫の誰に聞とて鳴明す覽

〈宜候〉

27 秋の夜の夢も結ぬひとりねにうきこと告て鳴明すむし

○秋の夜の夢も結ぬひとりねにうきこと告て虫も鳴らし

〈宜候〉

28 誰を待虫さへ長き此夜半を我恋ならば鳴もとまらめ

つれなくも独ぬる夜の小筵に聞程しげきむしの声哉

鳴虫は夢ならなくて秋の夜の長きをかこつ浅茅^{アサ}の宿

○虫の音に夢をさまして秋の夜の長きをかこつ浅茅^{アサ}の宿

〈珍重候〉

霧中鹿

31 棹鹿の声聞ゆ也立籠る霧踏分ていつち行らん

○棹鹿の声聞ゆ也立籠る夕霧分ていつち行らん

〈宜候〉

32 立籠る小倉の山の朝霧に姿はあらで棹鹿の声

○立籠る小倉の山の朝霧に姿は見えぬ棹鹿の声

見渡せば霧立籠て山も無妻こふしかの声計して

長き夜の明ても里は深かりしまだ朝霧に鹿の鳴つれ

霧深き遠の外山になく鹿の声にや妻を恋渡る覽

36 ○霧深き岑ふみ分て足曳の山路越行棹鹿の声

〈宜候〉

寒夜千鳥

37 ○明やらぬ冬の夜寒み淡路嶋かよふ千鳥の声ぞ聞ゆる

〈宜候〉

38 ○冬の夜の汐風寒き海つらに友呼かはしちどり鳴也

〈珍重候〉

39 ○さらでだにね覚物憂冬の夜に浦風寒く千鳥鳴也

〈珍重候〉

40 寒き夜はねられぬ物か明迄かよふちどりの鳴もとまらず

41 寒る夜は旅のうきねの手枕にしば鳴千鳥もれて聞ゆる

42 ○須磨の浦汐風寒き冬の夜に友呼かはし千鳥鳴也

〈宜候〉

枯野

43 ○冬枯の草葉のいろは浅茅（マユ）ののののののはら霜ぞ寒ぬる

44 いつしかと霜の置より宮城野は行多（マユ）もあらず枯増る也

45 ○枯残る小笹のみどりさむけて秋の花野々おもかげもなし

〈宜候〉

46 哀実伏屋に生る秋草の穂に出ながらかるゝ思は

47 ○朝霜の置初しよりいつしかと枯てぞ見ゆる宮城のゝ原

48 冬枯の小野々千種に風寒て影のみ残るあきの色哉

山家松

49 柴の戸をさして住身はいつと無かはらぬ色の松を友なふ

○柴の戸をさして住身はいつと無かはらぬ色の松ぞ友なる

〈宜候〉

50 ○柴の戸に朝夕独住る身はたゞ松をのみ友と社すれ

〈宜候〉

51 松風の音ならなくて山住のうさを訪来る人もあらねば

○松風の音信ならで山住のうさを訪来る人もなき暮

〈宜候〉

52 若松に長閑風の吹ときは都の春も思ひやられる

○山松に長閑き風の吹ときは都の春も思ひこそやれ

〈宜候〉

53 ○柴の戸に馴て住身は朝な夕なかはらぬ色の松を見る哉

柴の戸に松吹風のうきふしをとふ人なさに思ひ暮しつ

〔奥書〕点三十六首／右何も珍重／宣阿（花押）

〔点取表〕副 九首八点 美七ツ

宜 同 七点 同六ツ

仙 同 八点 同七ツ

覚 同 四点 同三ツ

形 同 四〔五〕ヲ見セ消チ〕点 同三ツ

貞 同 五点 同四ツ

C 副隆等和歌三十一首

〔端裏〕 正徳元卯梅月堂加筆

〔内題〕 詠三十一首和歌／仙庵上

早苗 副隆

1 御代豊成を印に室の苗取てふ民のわざもたゆまず

〈一、二句、か様のつゞけ様、悪候〉

同 其由

2 早苗取田蓑の袖の雫にもぬれてや雨の暮惜む覧

○早苗取田子の袂の雫にもぬれてや雨の暮惜む覧

〈此字「歌題ノ「同」字ノコト」、不入。初の「早苗」と計候て、同人の哥にても、又は点取などのあまたの哥でも、

「同」の字は不入候〉

同

同 宜風

3 足曳の山の奥田も水増て取くばりつゝ早苗種けり

同 好覚

4 五月雨の小止もあらぬ中井戸の水増りつゝ早苗とるなり

○五月雨の小止もあらぬ小山田の水増りつゝ早苗とるなり

同 好形

5 〇五月雨の晴間あらねど住吉のみとしろ小田に早苗取なり

同 仙庵

6 〇早苗取田子の裙はぬれくゞて干間稀成五月雨の空

〈宜候〉

同 貞恒

7 〇早苗取小田の水口打はへて引しめ繩に露ぞ乱るゝ

同 交計

8 降はへてとりくゞ持る袖見れば若苗色のころもきに晁

秋夕 仙庵

9 物思ふ身にはあらねど折にふれてゆふべの風に驚かれぬる

○物思ふ身にはあらねど秋くればゆふべの風に驚かれぬる

〈珍重〉

同 副隆

10 袖ぬるゝ憂時しもは山おろしはげしき跡アトの秋の夕暮

同 貞恒

11 秋はたゞ草よりしげく置露を夕べの風や吹そゞぐらむ

○秋はたゞ草よりしげく置露を夕べの風の吹もはらはず

〈宜候〉

同 宜風

12 萩の露吹払ひぬる夕風は物淋しげに見へミ渡るなり

○萩の露吹払ひぬる風の音に物の淋しき秋の夕暮

同 好形

13 〇秋のきし其夕べより白露の玉かと見ゆる宮城野ゝ原

〈宜候〉

同 好覚

14 初雁の声も雲井に夕暮の煙ぞ霧の色はそめ晁

- 15 同 其由
○松風に鳴の羽がき音信ていとゞ身にしむ秋の夕暮
- 16 落葉 宜風
時ぞとて我住里は尾も山も時雨のみして木の葉散也
○ときぬと我住里は尾も山も時雨のみして木の葉散也
〈「て」文字、耳に立候〉
- 17 同 好形
○きのふけふ時雨初しか足曳の山の奥まで木の葉降也
副隆
- 18 同 副隆
淋しさを友なふ里の小夜嵐吹てぞつもる軒は落葉に
〔右一首、貼紙二上書〕
- 19 同 好覚
風の吹度く〜に今ははやあはれ木の葉の散果ぬらん
○風の吹度く〜に今ははやあはれ木の葉も散果ぬらん
〈珍重〉
- 20 同 仙庵
寂しさを夫としらせて昨日今日柴の扉に木の葉散なり
〈珍重く〜〉
- 21 同 貞恒
遠近の山はきのふに引かへて杪まばらに木の葉散なり
〈宜候〉
- 22 同 其由
神無月時雨つれ添山風にさそはれ落る木の葉也けり
- 23 同 其由
訪るべき世にしなれば柴の戸の落葉く〜に道やうめけん
〈「落葉」と計にてよく候。かさねは、きよからず候〉
- 24 鶯 宜風
○春来ぬと谷の戸出し鶯の声も長閑に告わたる也
- 25 同 其由
梅枝に折く〜宿る鶯も初音長閑き心地社すれ
〈「心ちこそすれ」と申詞は、制の詞とてよまぬ法にて候〉
- 26 同 仙庵
長閑成春をしらせて鶯の我住里に里馴にけり
○長閑成春をしらせて鶯の我住里に馴て鳴けり
〈宜候〉
- 27 同 好覚
降積し高ねの雪は消ね共春をしらせてうぐひすの声
○降積し高ねの雪は消ね共春をしらすうぐひすの声
〈宜候〉
- 28 同 副隆
おしてるや難波の梅も鶯の鳴ては増るにほひなりけり
〈「梅」の方、つよく成候〉
- 29 同 鹿芥
時来れば何あらそはん梅枝の雪の中にもうぐひすの声
- 鹿芥

○時来ればを(マ)のれ春しる谷の戸の雪の中にもうぐひすの声

〈宜候〉

同

貞恒

里駟るゝ程鶯のこゑしげく長閑さしれと鳴渡覽

〈二句、つまり候〉

同

好形

31 ○いつと無聞初しより鶯の鳴音待るゝ春のあけぼの

〔奥書〕点十八首／何も面白珍重く／宣阿（花押）

〔点取表〕副隆 四首

其由 同 点式

宜風 同 点参

好覚 同 点参 美式

好形 同 点肆 美卷

仙庵 同 点参 美肆

貞恒 同 点式 美式

交計 壹首

鹿芥 式首点卷 美卷

D 好形和歌百首

〔端裏〕梅月加筆正徳二辰年

〔内題〕詠百首大和歌／好形上

立春

1 今朝はのみきのふにかへて山の端も日影長閑き春は来にけり

○今朝ははやきのふにかへて山の端も日影長閑き春は来にけり

〈宜候〉

雪中鶯

2 ○朝な／＼雪は降ともあふ坂の杉の木ふかく鶯ぞ鳴

谷鶯

3 木深くもしげれる谷に住駟て去年に替らず鶯ぞ鳴

残雪

4 此春はわけて雲井や寒ぬらん山の端毎に残るしら雪

○行先も見えぬ霞の上に猶あらはれ残る峯の白雪

柳

6 ○何国より吹ともあらぬ春風にみだれて見ゆる青柳の糸

〈宜候〉

夜梅

7 板間よりもれて来るらんよな／＼の枕にたえぬ梅が香ぞする

○板間よりもれて来ぬらんよな／＼の枕にたえぬ梅が香ぞする

若草

8 消残る雪の下にもむら草の緑に見ゆる春の恵に

へ「に」どまりにては、上へかへしていひきりてよく候。此

哥、きれ申さず候

帰雁

春風につばさ任せて故郷へ遠近帰る雁金のこゑ

へ「故郷へ」「山へ」「野へ」など、「へ」の字のてには、よ

まぬ事に候。「故郷に」「山に」「野に」とよみ候

夜帰雁

10 立籠る霞の中に鳴つれてまだ夜深くも帰る雁金

○立籠る霞の中に鳴つれてまだ夜深くも帰る雁金

〈珍重〉

春月

11 さらでだに霞む習を片敷の袖の涙のはるの夜の月

山の端も見えぬ計に立籠る霞をつとふ春の夜の月

○山の端も見えぬ計に立籠る霞をつたふ春の夜の月

〈宜候〉

蛙

13 ○霞む夜は月をかこちて苗代の水口毎にかはづ鳴なり

春雨

14 ○思ひこそ猶増りつれ春雨のはれ間もあらぬけふの夕は

名所花

15 白雲と見まがへるまで埋れて花の香深きみ吉の、奥

○白雲と見まがふまでに埋れて花の香深きみ吉の、奥

〈珍重〉

暮山花

16 かくばかり山路越来て春の日の暮るゝも惜しき花の下陰

○あかずなを山路越来て春の日の暮るゝぞ惜しき花の下陰

〈珍重〉

藤

17 ○夏近き空にも成ばきのふけふ田子の浦藤咲初にけり

疑冬

18 行春の名残しらせて山吹の咲もとまらぬ玉川の里

〈四句、猶可有候〉

暮春

19 吉野川浪に散浮はなのみなながれつくれば春ぞ暮行

○吉野川浪に散浮はなもみなながれてはやく春ぞ暮行

〈珍重〉

更衣

20 移ひし花の袂をかへぬれば今朝は身にしも涼しかりけり

へ「にしも」のてには、随分よまぬがよく候

卯花

21 ○影清き月の夜比は卯の花もまして色そふ玉川の里

〈珍重〉

初時鳥

22 久かたの空よりもれて足曳の山時鳥はつ音をぞ鳴

〈枕詞、おほく候〉

待郭公

23 待侘る程はあらねど郭公只一声に月ぞ更行

五月五日、菖蒲を

24 一夜だに明しかねたる蘆の屋もけふはあやめのかりぶきの宿

五月雨

25 きのふけふ晴間あらねば中くく^くに暮しかねたる五月雨の空

く「中くく」、か様はあしく候。かへりての心にて候

人の許より「けふも猶晴ぬ日数に浦波の立増り行五月雨の

空」と読て来りければ、返し

26 ○五月雨の晴ぬ日数に和歌の浦の汀もなみに立替るなり

早苗

27 五月雨に山の岡辺も水ましておのが田毎に早苗取なり

く「山の岡べ」、むつかしく候。「岡べ」とばかりにてよく候

五月雨に袖ぬらしつゝ君が代の恵広田に早苗とるなり

○君が代の恵も広き千町田に早苗とるなり五月雨の空

く珍重

蛍

29 難波潟蘆の葉そよぎ吹風にみだれ初つゝ飛ぼたるかな

○難波潟蘆の葉そよぎ吹風に光みだれて飛ぼたるかな

夏月

30 村雨の晴行跡はなつやまの葉毎に移る月の影かな

○村雨の晴行跡はなつやまの葉毎の露に月ぞうつろふ

く宜候

蝉

31 ○さらでだに暮しかねたる夏の日を梢に暑きせみの村声

夕貌

32 ○時しあれば日影清きて黄昏の露にぞまがふ夕顔の花

夕納涼

33 暮果て松の木陰の涼しきを夏とはさらにおもはざりけり

○涼しさは夏とはさらにおもはずに夕暮ふかき松の下陰

六月祓

34 夏暮るゝ河辺の道も見えぬ迄群つゝ人の御祓するなり

く二、三の句、少しひくめに候

立秋

35 絶がたき夏の日影は残れどもけふ立初る秋の空かな

堪がたき夏の日影は残れどもけふ立初る秋の空かな

く「堪」に候はん

初秋風

36 ○しげりあふ木々の梢も音たてゝ空吹風に秋は来にけり

七夕

37 あかずのみ契らん物か天の川あふ瀬希成星合の空

○あかずのみ契らん物か天の川こよひ希成星合の空

九重の秋ぞといへばおしなべて祭ぞしるき星合のそら

く「九重」は禁中の事にて候。これは、都の心と見え候ゆへ、

申候

七夕後朝

39 数多逢契ならねば中くくにつらき別のかさゝぎの橋

- 47 秋風に軒端の萩も音立て身の外ならぬ夕暮の空
- 46 秋夕
○船寄る波の音かと聞ばかり蘆の葉そよぎ秋風ぞ吹
- 45 海辺秋風
秋風の吹かとすれば浦く／＼の波より音の立まさるなり
- 44 故郷の軒の秋萩咲しより末葉の露ぞ玉と見えける
へ「故郷の本あらの小萩咲しよりよな／＼庭の月ぞうつろふ」
の名哥の詞、相過候。まして置所かはらずして、よろしか
らず候
- 43 わけ行ば袖や朽なん末とをみ秋の花野に置く白露
○わけ行ば袖や朽なん末とをみ秋の花野にふかき白露
- 42 露
○風吹ば散とは見えて草の葉にまた置渡る秋のゆふづゆ
草花露
- 41 返し
袖はのみぬるゝ習よ草の葉も今朝しはわけて露けかりけり
○袖もなをぬれこそまされ草の葉をわけつゝ露の玉まつる日は
〈珍重〉
- 40 魂祭
なき玉をまつるに付て濡もないとゞかはかぬ露のたもとは
〈三句、いかゞ〉
- 48 常にだに人さへとはぬ山里もまして淋しき秋の夕暮
○常にだに人のとひこぬ山里はまして淋しき秋の夕暮
〈珍重〉
- 49 通来てかく住山のおく迄も心尽しのあきの夕暮
霧中草花
○穂に出し野辺の千種の見えぬ迄はるゝ間もなき秋の夕霧
朝顔
白露の消ぬ中より咲そめて日影待間のあさがほの花
〈下句、古哥にて候〉
- 51 人の許より、「残蟬」といふ題にて、「暑かりし梢の蟬の声
だにも秋ぞといへば涼しかりけり」と読て来にし返しに、
- 52 秋とのみおもふ物から山の端をならすも涼し蟬の村声
○秋きぬとおもふ物から山の端に今も涼しき蟬の諸声
旅館聞虫
- 53 草枕ね覚がち成秋の夜をあかでやむしの鳴明すらん
〈珍重〉
- 54 「世の人の絶て通はぬ庭とてや心の儘に虫も鳴らん」と、人
の許（注）□り読来し返しに、
- 55 山高み峯のかり庵に秋の来て枕をわたる雁金の声
○すむとだにしらぬ浅茅の庭なれば思ひを尽すむしのこゑかな
山家初雁

〈別て宜候〉

56 山里も秋ぞといへばおしなべて頃日雁の空に鳴なり

〈三句にてぎやうさんに候。ここもかしこも鳴様にて、初雁
めかず、面白からず候〉

朝鹿

57 明ぬれば真の、萩原踏分て同じ山路に鹿の行なり

58 ◎月残る伏見の野辺の朝霧に妻待鹿や鳴渡るらん

〈珍重〜〉

野外月

59 穂に出し草の色〜見ゆるまで月も移らふ春日野、原

○さき出し花の色〜見ゆるまで月も移らふ春日野、原

〈宜候〉

人の許より、「月万秋友」と云題にて、「あかず猶詠る月の

影なれば幾万代の秋を契らん」と読て来し返しに、

60 ○限有老の身なれど万代の影契べき秋の夜の月

〈珍重〜〉

月

61 ○詠やる千里の秋や爰ならん名も有明の山の月影

深山月

62 木の間もる深山の月ぞたゞならね（山道）□けて光は晴まさるとも

木の間もるみやまの月ぞたゞならね（山道）□けて光は晴まされども

〈「たゞならぬ」と候て、よく候。「晴[ま]さ[れ]ど[も]」

として、よし〉

九月九日、菊を

63 限無宿の白菊年にけふ幾千代祝ふ心ならまし

64 人の許へはじめて誘引せられけるに、菊を見て
したしくも語は友のしるべにて千年の秋の菊を見るかな

〈五文字、俗に候〉

名所紅葉

65 大井川波も錦と見ゆるまで小倉の山は紅葉しにけり

○大井川波も錦と見ゆるまで小倉の山は紅葉してけり

〈「しにけり」「しぬらん」のてには、よまぬ事に候。き、
のあしく候ゆへにて候〉

擣衣

66 ○秋風の吹より外に音たて、賤が蘆屋に衣うつなり

夜擣衣

67 秋風の更るに付て誰里も夜寒の床に衣うつなり

○秋風の更るに付て誰里も夜寒の衣うちまさるなり

暮秋

68 ○憂かりしと思ひながらも暮ぬれば猶したはる、秋の空かな

初冬

69 さのみなど思はぬ中に谷水の氷ると見えて冬は来にけり

〈「氷」はや過候〉

夕時雨

70 ○木枯に松をならしてむら雲の山よりめぐる夕時雨かな

夜時雨

71 ○このごろはねられざりけり故郷のあれぬる軒の小夜の時雨に

〈珍重〉

暁更時雨

72 長き夜のね覚は物をおもへとて暁毎に降時雨かな

○長き夜のね覚は物をおもへとて暁毎に降時雨かも

〈宜候〉

路落葉

73 ○うすくこく染にし秋の色ながら木の葉ふりしく森の下路

冬月

74 ○野も山もなべて嵐の寒ぬれば影さへ氷る冬の夜の月

〈珍重〉

海辺千鳥

75 ○夕暮は奥津の浜の浜風にむれいるちどり鳴さはぐなり

夜水鳥

76 冬川の入江の波に音するは霜夜の鴛の友ねなるらん

○冬川の入江の波に音するや霜夜の鴛の友ねなるらん

初雪

77 埋るゝ程はあらねどみ吉のゝ山の奥まで降る白雪

〈「初」の字の心、うすく候〉

浦雪

78 ○蘆の葉のそよぐ音しもなかりけりふちえの浦は積る深雪に

船よする浦は（イ）の波も氷るまでこのごろ晴ぬ雪の空かな

船よする浦は（イ）の波の氷るまでこのごろはれぬ雪の空かな

71 〈「浦は」、海辺にて候はゞ、氷らぬ物にて候。古哥に句作

有ても、よむ事いやに候〉

歳暮

80 ○限有冬の日なればなべて世（イ）におしむ甲斐なく暮るゝ年かな

忍恋

81 おもひ余る涙に袖のくつるまで我名ひとつぞもらしかねぬる

○おもひ余る涙に袖のくつるより我名のよそにもれぬべき哉

今は早袖に涙やもれぬらんかねて人目をしのぶ余りに

〈我袖にて候歟。他人のうへの袖に「もれぬらん」とはいか

ゞに候〉

返し

83 人目をばしのぶとすれど我袖は涙の川に淵瀬さだめぬ

○人目をばしのぶとすれど我袖の涙の川ぞ淵となりゆく

〈「瀬」と候ては、涙のあしく成事に候。次第深く成心にて、

よく候〉

祈恋

84 難面もおもふ物から御祓川かけてぞいのる神のしらゆふ

○うくつらくおもふ物から御祓川かけてぞいのる神のしらゆふ

〈宜候〉

寄風恋

85 荻の葉にそよとの風の音信もあらぬゆふべは袖ぞ濡ける

○荻の葉にそよとの風の音信もあらぬゆふべは袖ぞ露けき

待夜はゝ軒吹風の音だにも聞よりかねてねられざりけり

恋といふ題にて

87 ○偽とおもひながらも身に添てわすれがたきは恋路なりけり

別にし夜は、誓ひし言の葉の有とはしりてうたがはれつゝ、

88 〈つゝ〉どまり、よまぬ事にて候。てには遣の伝授にて候〉

旅宿夢

89 故郷をおもふに付てたびまくらうきねの夢に見えぬ夜もなし

○故郷をおもふに付てたびまくらかりねの夢に見えぬ夜もなし

〈珍重〉

羈中夕

90 旅はうきならひ成とも日を経てはゆふべの空のいとゞ難面き

へ「つれなき」といふ詞、つらきと御心得候様に見え候、心

ちがひに候。「つれなき」はじやうこはく、心つよき事に

て候〉

羈中藤

91 旅衣いつ帰るべき身ならねど春は暮ぬと咲るふじ(マ)なみ

羈中更衣

92 旅枕幾夜の夢のかさなれば夏来にけりと衣かへぬる

無常

93 佛も一夜にかはるあだしの、露よりも猶ぬるゝ袖かな

神祇

94 ○たづね入山路はなべて霞めども嵐にはるゝ三輪の神杉

秋神祇

95 ○春日山朝日にむかふ影見ればきよくもむすぶ木々の白露

山

96 ○高根には道こそなけれ夏だにも雪ふみわくる越の白山

川

97 ○心からおもふことゝて宮川は清くもすめる波の音かな

〈宜候〉

古寺

98 ○聞度に驚物はきよみ寺暁寒るかねのこゑかな

寄松祝

99 ○高砂の尾上の松は君が代のつきぬ恵のいろも替らじ

〈珍重〉

100 ○万代も替らぬ色の置露にあらはれ見ゆる宿の松が枝

〔奥書〕愚点六十五首 此内長式／右一卷別て面白御哥共／珍重

く／宣阿（花押）

E 仙庵等 and 歌四十三首

〔端裏〕宣阿加筆正徳三辰年(マ)

〔内題〕詠四十三首倭歌／玄仲上／冬音上

初春

1 目馴ぬる草木も千代の色見えて長閑に明る天の初春

○目馴ぬる草木も千代の色見えて長閑に明る初春の空

仙庵

- 10 長月やけふしも折るしら菊にちとせのあきを掛てかざらん
九月九日 冬音
- 9 ○穂に出し門田の稲葉吹風にひかで鳴子の音ぞ隙なき
〈珍重〉
田家秋興 冬音
- 8 見聞をも哀はもれぬ秋の夜に物おもふころの棹鹿の声
夜鹿 冬音
- 7 秋風に時や契りて漸寒き雲路をわたるはつかりの声
初雁 副雄
- 6 漸寒の増るにつけてなく虫の秋はつるとは思ひしらじや
虫 好寛
- 5 ○迷来し道とはしらで狩人のともしのひかり頼はかなさ
仙
- 4 妻恋る鹿の目をだに合間もなき短夜にともしする哉
〈「ともし」は、鹿子にて候。「妻恋」、いかゞ〉
照射 仙
- 3 野を広み雪の下もえ尋来て摘どたまらぬけふの若なは
野を広み雪の下もえ尋来て摘どたまらぬけふの若なは
若菜 仙
- 2 ○尽せしな君が齢は引うゆる子の日の松の色をためしに
子日 仙
- 18 ○神無月時雨を誘ふ山風にまづ音立てふる木の葉哉
落葉 冬音
- 17 尋来る人もあらじにいく度か夜半の時雨を誘来ぬらん
夜時雨 冬音
- 16 よそにのみ見しは程なく時雨来て日影たまらぬむら雲の空
○よそにのみ見しは程なく時雨来て日影へだつるむら雲の空
時雨 冬音
- 15 長き夜とおもひながらも暁のかねを待間ぞ秋の空なる
九月尽夜 冬音
- 14 露時雨幾しほ染かつくすらんくれなるふかき山姫の袖
露時雨幾しほ染て木々は今くれなるふかき山姫の袖
紅葉 冬音
- 13 隔なき秋のよさむのから衣誰為月に打明すらん
○暮て行秋のよさむのから衣誰為月に打明すらん
月前擣衣 冬音
- 12 風たえて煙とともにあき霧のゆふべをこむる遠の山里
霧 冬音
- 11 ○此まゝに千年の秋をせきとめていろか流すな菊の下水
人の千裁にまかりて、水辺菊を 冬音
〈宜候〉
- 長月やけふしも手折るしら菊にちとせのあきを掛てかざらん
〈宜候〉

- 19 ○一通太山おろしにさそはれてもみち葉よどむ谷川の水
川落葉 冬音
〈珍重〉
- 20 山陰はなべて埋むと見る迄に落葉がうへの今朝の初雪
落葉霜 冬音
山陰はなべて埋むと見る迄に落葉がうへの今朝の初霜
○山陰はなべて埋むと見る迄に落葉がうへの今朝の初霜
〔霜〕に候
- 21 ○人とはぬ秋の哀もひきかへて霜葉にかはる庭の荻原
閑庭寒草 冬音
枯野 仙
- 22 頃日は秋の花野も名計に枯まさりぬる霜の下草
頃日は秋の花野も名計に枯て色なき霜の下草
〔宜候〕
山冬月 冬音
水鳥 仙
- 23 ○木の葉ちる山はあらはに霜寒てこほれる月の影ぞ淋しき
池水の水鳥 仙
○池水の水鳥はあらはに霜寒てこほれる月の影ぞ淋しき
水鳥 仙
- 24 つがひぬる翅に千代の契をやかさねて深きおしの毛衣
副雄
江水鳥 冬音
つがひぬる翅に千代の契をやかさねて深きおしの毛衣
- 26 ○にごり江の蘆間を広みこゝかしこつがひ離れぬおしの毛衣
雪 仙
○にごり江の蘆間を広みこゝかしこつがひ離れぬおしの毛衣
- 27 ○枝折して木こりの通ふ道もなし都の空も雪や降らん
仙
- 28 暁の鐘よりけふも降初て煙にまじる雪の暮哉
好覚
- 29 野も山も真白に雪の曙を大宮人はいかゞ見るらん
連日雪 仙
野も山も真白に雪の曙を大宮人はいかゞ見るらん
- 30 ○足曳の山路は日数ふるゆきにたえて音なき松の下折
山雪 冬音
○足曳の山路は日数ふるゆきにたえて音なき松の下折
山雪 冬音
- 31 ○出る日の光にいとゞ色副てまちかく見ゆる雪の山の端
風景好候
浦雪 冬音
○出る日の光にいとゞ色副てまちかく見ゆる雪の山の端
浦雪 冬音
- 32 天の原ふじの高根に見し雪を浪に吹まく田子の浦風
〔四句、いかゞ〕
積雪 冬音
天の原ふじの高根に見し雪を浪に吹まく田子の浦風
積雪 冬音
- 33 ふらばぞと待にし人も来ぬ迄に八重がきくらしつもる白雪
〔五文字、可有候〕
初恋 冬音
ふらばぞと待にし人も来ぬ迄に八重がきくらしつもる白雪
初恋 冬音
- 34 下もえの雪間の若な抓分て摘初るよりぬるゝ袖かな
〔恋の心、薄候〕
忍恋 冬音
下もえの雪間の若な抓分て摘初るよりぬるゝ袖かな
忍恋 冬音
- 35 涙川ふかき思をせきとめて袖より外にこゝろゆるさぬ
逢恋 冬音
○涙川ふかき思をせきとめて袖より外にこゝろゆるさじ
逢恋 冬音

36 ○恨つるこゝろもとけてから衣かさぬる夜半ぞ思ひ乱れぬ
仙

37 今迄は棄し命も逢見ては唯ながれとおもひぬるかな
別恋
冬音

38 ○鳥のねをよそになしても別路のつらさ隔てぬ明方の空
稀恋
仙

39 ○誓ぬる神もしらめや我こひの逢夜まれなる契りなりとは
雪中恋
冬音

40 消もせず立も増らずふる雪の下にこがるゝ蟹のもしほ火
寄煙恋
冬音

41 恋増る身は炭竈の夕煙絶ぬおもひぞ空にこがるゝ
○恋増る身は炭竈の夕煙絶ぬおもひぞ下にこがるゝ
寄滝恋
冬音

42 おく涙雨と増りてわきかへりたもとにきえぬ滝の白淡
寄鏡神祇
副雄

43 ○ます鏡底なる影の曇なくむかふこゝろや神もしるらん
〈宜候〉

〔奥書〕 点二十八首／何も珍重く／宣阿

〔点取表〕 仙庵 十二首 点九ツ

好覚 二首

副雄 三首 点二ツ

冬音 二十六首点十七